

April 5, 2026

悲しみは喜びに

ヨハネ 20:11-18

20:11 一方、マリアは墓の外にたたずんで泣いていた。そして、泣きながら、からだをかがめて墓の中をのぞき込んだ。

20:12 すると、白い衣を着た二人の御使いが、イエスのからだが置かれていた場所に、一人は頭のところに、一人は足のところに座っているのが見えた。

20:13 彼らはマリアに言った。「女の方、なぜ泣いているのですか。」彼女は言った。「だれかが私の主を取って行きました。どこに主を置いたのか、私には分かりません。」

20:14 彼女はこう言ってから、うしろを振り向いた。そして、イエスが立っておられるのを見たが、それがイエスであることが分からなかった。

20:15 イエスは彼女に言われた。「なぜ泣いているのですか。だれを捜しているのですか。」彼女は、彼が園の管理人だと思って言った。「あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えてください。私が引き取ります。」

20:16 イエスは彼女に言われた。「マリア。」彼女は振り向いて、ヘブル語で「ラボニ」、すなわち「先生」とイエスに言った。

20:17 イエスは彼女に言われた。「わたしにすがりついてはいけません。わたしはまだ父のもとに上っていないのです。わたしの兄弟たちのところに行って、『わたしは、わたしの父であり、あなたがたの父である方、わたしの神であり、あなたがたの神である方のもとに上る』と伝えなさい。」

20:18 マグダラのマリアは行って、弟子たちに「私は主を見ました」と言い、主が自分にこれらのことを話されたと伝えた。

イースターの礼拝では「主はよみがえられた。ハレルヤ！」と挨拶をかわすのが慣わしになっています。主の復活を祝って、私たちも「ハレルヤ！」と主を賛美しましょう。

「主はよみがえられた。」「ハレルヤ！」

「主イエス・キリストはよみがえられた。」「ハレルヤ！」

「じつに、主はよみがえられた。」「ハレルヤ！」

一、マグダラのマリヤの悲しみ

イースターは喜びの日です。しかし、喜びの日に泣いている人がいました。マグダラのマリヤです。「マグダラ」というのは町の名前です。イエスが「ナザレのイエス」と呼ばれたようにマグダラのマリヤもその出身地で呼ばれました。けれども女性が出身地で呼ばれるのはあまりないことです。マグダラのマリヤはおそらくマグダラの町の有力者だったのでしょう。おそらくは財産家の未亡人だったのかもしれませんが、しかし、彼女は「七つの悪霊」に憑かれていました（マルコ 16:9）。「七つの悪霊」が何を意味するのか、詳しいことはわかりませんが、イエスによって「七つの悪霊」から解放されるまでの彼女の人生はじつに悲惨なものだったことでしょう。

私はカリフォルニアのサンノゼに長く住んでいましたが、サンノゼの観光名所の一つに「ウィンチェスター・ミステリー・ハウス」があります。ライフルのビジネスで財をなしたウィンチェスター氏の夫人サラが建てたものです。そこには入り口のないドアや行き止まりの階段など、謎めいたものがたくさんあって、まさに「ミステリー・ハウス」です。それは、サラが夫が売った銃で死んだ人々の霊に悩まされ、それを鎮めるため、38年もの間、一年365日、一日24時間、絶えず増築を重ねてきた結果でした。サラには二千万ドル以上の夫の遺産があり、一日千ドル以上の収入がありました。1800年代のことですから、現在の価値に直せば莫大な財産になります。しかし、サ

ラは毎日悪霊に悩まされ、無計画で無意味な家の増築を続けたのです。どんなにお金があっても、何の喜びもない人生をサラは送りました。イエスに出会うまでのマグダラのマリヤもそのようだったかもしれません。サラ・ウィンチェスターはイエスにではなく、霊媒師に頼ったため、悪霊から解放されることはありませんでしたが、マグダラのマリヤはイエスによって「七つの悪霊」から解放され、救われたのです。

救われる前の状態が悲惨であればあるほど、救いの素晴らしさがよく分かります。救われる前の罪が大きければ大きいほど、赦しがどんなに恵み深いものかを身にしみて体験するものです。「多く赦された者は多く愛する」（ルカ 7:47 意識）とあるように、マグダラのマリヤもイエスを愛しイエスに従う者になりました。マグダラのマリヤはイエスが十字架にかけられたときも、母マリヤとともに十字架のそばまで来ています。リマタヤのヨセフが自分のために準備していた墓に葬られるのも見届けています。そこは「園の墓」と呼ばれ、きれいな庭園の中に、裕福な人々の立派な墓が並んでいるところでした。マグダラのマリヤはそこが十字架であろうが、墓であろうがどこまでもイエスについていきたいという熱い思いを心に持ち、それを実行する堅い意志を持っていた女性でした。

ところが、日曜日の朝、園の墓に来たマリアは、イエスの遺体が墓から失くなっているのを見ました。マリヤは泣き伏すばかりでした。ふたりの天使がマリヤに「なぜ泣いているのですか」と声をかけましたが、マリヤは「だれかが私の主を取って行きました。どなに置いたのか、私には分かりません」（13節）と答えています。マリアは、まだ、イエスが復活されたことを知らないでいたのです。イエスが復活されると預言してお

られたのを、他の弟子たちと同じように、理解していなかったのです（ヨハネ 20:9）。マリヤは永遠にイエスを失ったと思い悲しみにくっていました。泣きながら、空っぽで、暗い墓を見つめているだけでした。

私たちも復活を知らなかったとき、心に、空っぽの墓のような空虚で暗い穴が空いていました。イエスの復活を知り、信じるまではそうした心の虚しさをどんなにしても満たすことができませんでした。私たちがその虚しさから解放されたのは、復活され、生きておられるイエスによってでした。

二、マグダラのマリアの喜び

泣きながら墓の入り口にうずくまっていたマリアにもう一人「なぜ泣いているのですか」と後ろから語りかける人がいました。彼女はそれが園の管理人だと思い、すこし後ろを振り向いたものの顔も見ないで「あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えてください。私が引き取ります」と答えました。けれども声をかけたのは園の管理人ではなく、復活されたイエスご自身でした。マグダラのマリアはイエスがそこにおられるのに、悲しみのあまりそれに気づかないでいたのです。悲しみがあまりにも深いと、イエスを見失ってしまうことがあるものです。

けれども、イエスがマリアに「なぜ泣いているのか」と言われたのは「泣いてはいけない」という叱責のことではありません。イエスは「悲しみの人」と呼ばれ、私たちの悲しみを知って、ともに泣いてくださるお方です。イエスは「マリア」と彼女の名を呼びました。自分の名を呼ばれたマリアは、その声にハッとしました。振り返ってみるとそこにイエスがおられ

ました。マリアは復活されたイエスにお会いしました。失ったと思っていたイエスが彼女の目の前におられたのです。

イエスが十字架から三日目のイースターに復活され、「見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがとともにいます」（マタイ 28:20）と約束しておられるのを、私たちは知っています。なのに、イエスが私とともにおられるということを確認できないときがあります。悲しみ、嘆くともでいかなくても「私は辛い思いばかりしている」、「私には良いことなど何一つない」などといった思いの中に閉じこもり、そうしたものに縛られてしまうことがあります。そんなとき、イエスが、マリアにしてくださったように、私たち一人ひとりの名を呼んでくださることを思い起こしましょう。イエスは「なぜ泣いているのか。わたしが共にいる。泣かなくても良いのだよ」と語ってくださるのです。マリアが空っぽの墓に目を向けている間は悲しみと虚しさしかありませんでした。しかし、そこから目を離して、イエスを見上げたとき、マグダラのマリアは大きな喜びに満たされました。私たちを名指しで呼んでくださるイエスに目を向けましょう。信仰によってイエスの顔を仰ぎ見るとき、悲しみは喜びに変わるのです。

三、マグダラのマリアの使命

「マリア」という声に振り向いたマリアは、そこにイエスが
おられたので「ラボニ」（先生）と言って、思わずイエスの足
にすがりつこうとしました。しかし、イエスはそれを許さず、
「わたしにすがりついてはいけません。わたしはまだ父の
もとに上っていないのです」と言われました（17節）。イエス
の十字架と復活が全世界に宣べ伝えられ、人々が救われるた

め、イエスは十字架と復活ののち、いったん天に帰り、そこから聖霊を遣わす必要がありました。そして福音が全世界に宣べ伝えられた後、イエスは、もう一度、世に来られ、その救いを完成してください。これは、最初からの救いの計画であり、マリアも、他の誰も、イエスを地上にとどめておくことはできないことを言われたものです。

イエスはマリアがご自分の足もとにひれ伏しているままにはせず、マリアを立たせ、弟子たちのもとに遣わされました。それは、まだイエスの復活を信じられないでいる弟子たちにイエスが確かによみがえられたことを知らせるためでした。復活の主にお会いした者には、それを他の人に伝え、知らせる使命が与えられているからです。「主はよみがえられた！」それは最初天使たちによって伝えられました。しかし、その次にそれを伝える栄誉を得たのは、ペテロでも、ヨハネでも、他の男の弟子たちでもありませんでした。女性のマグダラのマリアだったのです。18節にこうあります。「マグダラのマリアは行って、弟子たちに『私は主を見ました』と言い、主が自分にこれらのことを話されたと伝えた。」マリアはイエスの言葉どおり、その使命を果たしたのです。

私は小学生のときに母を亡くしました。母は長い間入院していましたが、退院したのは良くなったからではなく、もう手の施しようがなかったからです。往診の医者が慌ただしく出入りし、しばらくして母の臨終を告げました。母を亡くしたとき、涙があふれました。何度も顔を洗いにいったのを今でも覚えています。それ以来私の心には「どんなに自分を愛してくれる人がいても、人はいつか死ぬのだ。いのちも、愛も消えていくのだ」という虚しい気持ちを持つようになりました。しかし、高

校生のときにイエス・キリストを知りました。イエスが私の罪のために十字架に死に、私の救いのために復活されたことを信じました。私を愛して十字架で死なれたイエスは、死んだままではなく、復活され永遠までも私を愛してくださることを知りました。死で終わらない愛を知ったのです。イエスは、マリアに声をかけてくださったように、私にも声をかけ死の悲しみを復活の喜びに変えてくださいました。それからは、このイエスを伝えたい、そんな思いが心に一杯になり、福音を伝える者となりました。

このイースターの日、復活されたイエスに涙をぬぐわれ、悲しみから立ち上がり、イエスを信じる者は誰も「主はよみがえられた！」との喜びの知らせを証しする者と、主がしてくださることを信じ、願います。

（祈り）

父なる神さま、あなたは独り子を世に遣わし、その十字架によってどんなに私たちを愛しておられるかを示してくださいました。そればかりではなく、あなたはイエスの復活によって、その愛が決してなくなるもの、いつまでも残るもの、私たちの人生に変わることなく伴っていることを証ししてくださいました。この復活の日、私たちはイエスと共に歩み出します。私たちの日々を導き、新しい命に生かされていることを感謝して歩み続ける者としてください。よみがえりの主イエス・キリストのお名前です。